

「極言的発話と自明の発話」

大久保 朝 憲

本稿は、大久保（2000）であつかった「擬似矛盾文」および「擬似同語反復文」という二つの形式の発話の論証意味論的な記述を出発点に、一見タイプの違ういくつかの発話が、基本的にはこの両者どちらかと同じように記述できることしめすことを目的とする。そして、「擬似矛盾文」は、われわれが「極言的発話」とよぶ、より大きな発話の集合に、「擬似同語反復文」は「自明の発話」とよぶより大きな発話の集合にふくまれることをしめし、発話のつながりのなかで、この両者の発話が対照的かつ重要な役割を演じていることをみていく。また、作例によるモデルの提示としての大久保（ibid.）に対して、本稿はフランス語の採集例を中心に取り上げた、ケーススタディの試みでもある。

1. 擬似矛盾文と擬似同語反復文

この二つについての詳細は大久保（2000）を参照されたいが、以下にそこで議論を概略的にしめす。

「擬似矛盾文」とは、*Cette voiture n'est pas une voiture.*のように、主語と述語に同じ名詞句を含む名詞述語文の否定形の発話のことで、「擬似同語反復文」（以下「擬似同復文」とする）とは、*Une voiture est une voiture.*のように、同じ形式の肯定形の発話である。「擬似」としているのは、言語表現を論理命題に一致させるという立場をわれわれが取らないことによる。両者の発話は、ほぼ同様の文脈的な条件のもとで生起しつつ、対照的なはたらきをしている。まず、文脈的には、主語となる名詞は、なんらかの形で否定的な意味限定を受けている。(1)の擬似矛盾文、(2)の擬似同復文がなりたつためには、たとえば次の *en panne* のような修飾語によって、*voiture* が

否定的に意味限定されている必要がある。

- (1) Cette voiture est *en panne*, alors {ce/cette voiture} *n'est pas une voiture*.
Elle ne t'amène nulle part.
- (2) Cette voiture est *en panne*, mais une voiture est une voiture. Tu dois payer l'impôt.

われわれは、発話や単語などの言語表現の意味記述に関して、それに対応する現実その他の言語外的な事態ではなく、それにどのようなほかの言語表現が結びつきうるかという点を重視する。たとえば *c'est une voiture* という言語表現に続けて、われわれは以下のようにさまざまに続けることができ、このような可能な連鎖の集合こそが、その言語表現の「意味」であると考えている。

- (3) C'est une voiture, donc {on peut aller loin / tu dois payer l'impôt / elle va polluer l'environnement / etc.}

en panne という意味限定が「否定的」であるというのはまさにその意味で、われわれは、この表現によっても、文法否定がそうするのと同じように発話の流れを変えることができる。

- (4) a. C'est une voiture, donc on peut aller loin.
b. C'est une voiture *en panne*, donc on ne peut pas aller loin.
c. Ce n'est pas une voiture (mais un vélo), donc on ne peut pas aller loin.

このように、文法否定と同じように発話の流れを逆転させる修飾要素は、Ducrot (1995) では逆転型脱現実化修飾子 *modificateur déréalisant inverseur* (MD-inv) と呼ばれているが、擬似矛盾文、擬似同復文では、それらの生起文脈中に MD-inv の存在が必ずみとめられるという特徴がある。そこから、擬似矛盾文とは、MD-inv による発話を端的な否定に言い換えた発話のことであり、擬似同復文とは、同じ MD-inv による発話に対立させて、それにもかかわらず *voiture* は *voiture* だとするものだというのが大久保 (ibid.) の主張であった。本稿では、これをもう少し明確にし、以下に述べるような対照的な関係があることをしめす。

擬似矛盾文 *Ce X n'est pas un X* は、主語名詞 *X* が MD-inv によって修飾限定を受けていることを前提に発話され、以下のような言い換えのパターンをつくっている。

(5) *X MD-inv DONC NEG-Y,*

c'est-à-dire,

NEG-X DONC NEG-Y

(NEG は否定もしくはそれに準ずるもの)

voiture の例をこれにあてはめると次のようになる。

(6) *C'est une voiture en panne (donc on ne peut pas aller loin),*

c'est-à-dire, cette voiture n'est pas une voiture,

donc on ne peut pas aller loin.

ここで、*c'est-à-dire* による言い換えを可能にしているのは、MD-inv であれ、文法否定 NEG-X であれ、それがともに *X DONC Y* という論証を逆転し、{MD-inv/NEG-X} DONC NEG-Y としているという点であり、かつそれのみである。これに対して、*X MD-inv* は *X DONC Y* 以外に *X* に結びつきうるほかの論証を受け入れる可能性があるが、NEG-X は、原則として、*X* に結びつくあらゆる論証を逆転してしまうという違いがある。したがって、否定は、論証の逆転という点で、あらゆる脱現実化よりも強い論証力をもち、その意味で、擬似矛盾文は、単なる修飾語にすぎないものを否定に言い換えるという点で「極言的」であるといえることができる。

他方、擬似同復文が出現する論証的な文脈でも、擬似矛盾文と同じように、MD-inv によってある論証 *X DONC Y* が逆転されているが、擬似矛盾文でこれが端的な文法否定に言い換えられるのに対して、擬似同復文では、MD-inv が否定的な修飾語であるということそのものが却下され、*X MD-inv DONC NEG-Y* に対して、*X* が *X* である以上、*X DONC Y* は堅持されるということが主張されている。次の(7)、(8)を(5)、(6)と比較されたい。

(7) *X MD-inv DONC NEG-Y*

mais

X DONC Y

- (8) C'est une voiture hybride (donc elle ne pollue pas l'environnement),
 mais, une voiture est une voiture,
 donc elle pollue quand même.

つまり、擬似同復文では、MD-inv の論証的否定性が、文法否定とはちがって取り消し可能であるという性質が利用され、X MD-inv, mais (toujours) X ということ、もとの論証 X DONC Y が保持されるのである。言い換えのつなぎことばが mais となることからわかるように、これは先行文脈にたいする「反論」として発話されている（大久保（2001）参照）。そして un X est un X とは、いかにも自明の発話である。これを仮に論理命題ととらえれば、恒真命題となり、情報伝達の発話ととらえれば何も言っていないに等しいということになる。この意味で、擬似同復文には分析文的な性格があるといえることができる。

以上が大久保（2000）の概略に若干の修正を加えたものであるが、次章以降で、これに類するほかの現象を考察してゆく。

2. 擬似矛盾文とその他の発話：隠喩・誇張表現

擬似矛盾文の発話にたいしては、たとえば« Tu exagères »というような表現でこれを受け、反論的にその極性を転換した擬似同復文を続けることができる。

- (9) A : Cette voiture n'est pas une voiture.

B : Tu exagères, une voiture est une voiture.

そして、ここで誇張だといさめられているのは、A の擬似矛盾文が、voiture に続くあらゆる論証 voiture DONC X を阻止してしまうという事実であり、これに対する B の擬似同復文によって、阻止されたこの論証を再提示する準備がととのう。このような発話のつながりは、擬似矛盾文以外の発話にもあてはめることができないだろうか。一般に「誇張法」もしくは「隠喩」と呼ばれるものには、同様のやりとりが可能なものがある。

- (10) A : Cette voiture est une casserole. Il ne faut pas la prendre pour y aller.

B : Tu exagères, cette voiture n'est pas une casserole.

Une voiture est une casserole と言える状況を想像しにくいことからわかるように、ここでは *voiture* にかかる *cette* という指示形容詞が重要な役割をはたしており、これによってとりわけ状態の悪いある特定の *voiture* が問題にされることになる。したがって、(10A)の発話は、擬似矛盾文の場合にならって以下のようにパラフレーズできる。

- (11) C'est une voiture très abîmée (DONC il ne faut pas la prendre),
 c'est-à-dire,
 c'est une casserole (DONC il ne faut pas la prendre).

この修飾限定 *très abîmée* は、(10A)の発話が、*casserole* *DONC* *NEG*-*prendre* *comme moyen de transport* とでも略記できる論証に結びついていることから同定され、このように、特定の論証を喚起するはたらきこそが、指示形容詞 *cette* の意味であるとわれわれは考える。そしてまた、擬似矛盾文の場合と同様に、ここでも(11)の *très abîmée* は、*voiture* に対する *MD-inv* であると言うことができる。つまり、ここでは、脱現実化修飾子 *très abîmée* を意味に含み持った名詞句 *cette voiture* が、*une casserole* に言い換えられることによって極言的な発話が構成されているのである。(10B)はそのような極言を否定しているのであり、(10B)のように言う代わりに、次のように言うことができることから、現象の平行性がみてとれる。

- (12) A : Cette voiture est une casserole. Il ne faut pas la prendre pour y aller.
 B : Tu exagères, une voiture est une voiture.

このような発話に結びついた論証構造と、擬似矛盾文のそれとの平行性は、次のようにしめすことができる。

- (13) 擬似矛盾文
 X *MD-inv* *DONC* *NEG*-Y, c'est-à-dire *NEG*-X *DONC* *NEG*-Y
 誇張的隠喩

 X *MD-inv* *DONC* *NEG*-Y, c'est-à-dire W *DONC* *NEG*-Y

擬似矛盾文では、X *MD-inv* によって ... *DONC* *NEG*-Y という論証が提示され、この論証に関してもっとも論証力の強い文法否定による *NEG*-X *DONC* *NEG*-Y への言い換えという「極言」がなされている。他方いまみた

誇張的隠喩では、明示的・非明示的いずれかのしかたで MD-inv によって限定された X MD-inv を言い換えるにあたって、否定ではなく、... DONC NEG-Y という論証に関してより論証力の高い別の語彙 W に言い換えるという「極言」がなされている (casserole が交通手段として無意味なことは、車でないもの (NEG-voiture) がそうでないのと同様に自明である)。両者に共通しているのは、論証力がより弱い論証が、より強い論証によって、無動機に、つまり「極言」的に言い換えられるということである。

ところで、(10A)の発話が「隠喩」か「誇張法」かという問題は、われわれにとっては本質的な問題ではない。本稿では、以下のように規定する「極言的発話」に、通常この両者の用語でよばれる発話のあるものがふくまれ、それが、対象世界を介入させることなく言語内的に記述できればよく、あとは解釈者が「現実」を参照して判断することがらであると考えている。つまり、それが隠喩か誇張法かということは、言語学の問題ではないということである。

「極言的発話」を以下のように規定する。

「極言的発話」

ある発話において、その主語の意味内容と述語のそれとの間に意味的齟齬があることが、その発話の語彙の意味内容のみによって知られ、その発話にたいして、« Tu exagères » というつなぎことばとともに反駁し、その発話の極性を転換（肯定は否定、否定は肯定に）することができるとき、その発話は「極言的発話」である。

「意味的齟齬」とは、主語 S と述語 P について、C'est à la fois S et P という発話が、S や P についての語彙内容のみでは容認できないものである。上記の 2 つの例について、われわれは、次のようにそれを確認できる。

(14) Cette voiture n'est pas une voiture. >

C'est à la fois une voiture et non pas une voiture.

(15) Cette voiture est une casserole. >

C'est à la fois une voiture et une casserole.

それでは、いくつかの具体例で以上の考察を検証してみよう。

事例 1

例(16)は、Okubo (2002) でも取り上げた事例で、この中の(16b)は極言的発話についてのわれわれの考察に典型的にあてはまる擬似矛盾文の例である。

(16) Mais tu sais, je crois qu'un jour un homme viendra et m'aimera et me fera un enfant, parce qu'il m'aimera. Et (a) l'amour n'est valable que quand on a envie de faire un enfant ensemble.

Si on a envie de faire un enfant, on sent qu'on s'aime. (b) Un couple qui n'a pas envie de faire un enfant n'est pas un couple, c'est une merde, c'est n'importe quoi, c'est une poussière... les super-couples libres...

(Jean Eustache, scénario du film *La maman et la putain*,

記号(a), (b), 下線は本稿筆者による, 以下も同様)

先に出てくる(16a)は意味的に(16b)に近いが、本稿の定義する極言的発話にはあてはまらない。どのような amour が valable かは、フランス語の amour という単語の語彙的な意味からだけではわからず、主語と述語の意味的齟齬をしめすことはできないからである。これに対して、(16b)については以下のように言える。ある限定修飾語を M とすると、XM n'est pas un X という発話はすべて極言的である。couple の現実での対応物（が同定できるとして）がどのようなものであれ、またそれを知っていようがいないまいが、この文の形式（擬似矛盾文の形式）のみによって、これが極言的発話であることが認可される。(16b)において脱現実化修飾語 MD としてはたらくのは関係節 qui n'a pas envie de faire un enfant である。また、後続する発話を見ると、(16b)はさらに、c'est une merde, n'importe quoi, une poussière などと言ひ換えられている。n'importe quoi についてはともかく、une merde, une poussière については、以下のようにわれわれの極言的発話にあてはまる。

- (17) Tu exagères, un couple qui n'a pas envie de faire un enfant, ce n'est pas une merde / ce n'est pas une poussière.

ここでは、これらの発話が、どういう結論的な発話に結びつくのか（下記(18)の NEG-Y にあたる部分）ということは明示されていないが、擬似矛盾文、誇張法的隠喩の発話が、並列して使用されているのは示唆的である。NEG-Y を仮りに Il ne faut pas le respecter (il faut le mépriser) とすると、次のような論証として記述できる。

- (18) X MD DONC NEG-Y, c'est-à-dire {NEG-X, V, W} DONC NEG-Y
couple qui n'a pas envie de faire un enfant DONC mépriser,
c'est-à-dire
{NEG-couple, merde, poussière} DONC mépriser

つまり、X MD がきっかけになって、擬似矛盾文と誇張法的隠喩が同時に構成されているということである。

事例 2

次の例の下線部は擬似矛盾文に近いが、擬似矛盾文が主語名詞の否定を述語とするのにたいして、ここではその反意語が述語になっている。

- (19) Mon regard était sans cesse attiré vers le ciel vide. Nombreux sont ceux qui ont évoqué, oralement ou par écrit, la puissance de ce vide laissé par les tours dans le paysage. Le regard les cherche là où il avait l'habitude de les trouver, et ne peut se résoudre à ne plus les voir. Leur absence est devenue présence.

(Salman Rushdie dans *Libération*, WTC 崩壊 1 年後の現場について)

(19)下線部では、主語名詞の *absence* にたいして、その反意語 *présence* が名詞述語となっている。(10)の例について少し述べたように、われわれは、名詞句を限定する指示形容詞や冠詞は、その名詞の論証を決定する要素であると考え。したがって、(19)では、主語にかかる所有形容詞 *leur* が重要で、意味をとってこれを書き換えると次のようになる。

- (19a) L'absence des deux tours de WTC est devenue présence.

つまりここでは、下線部が名詞 *absence* の脱現実化修飾子としてはたらくことで *absence* の「不在性」が弱められ、それが述語で *présence* と端的に言い換えられている。次に見るように、この構造は擬似矛盾文のそれとほぼ平行している。

(19b) L'absence des deux tours de WTC n'est pas/plus une absence.

先行するテキストから、この発話の論証構造をまとめると以下のようになる。

(20) X MD-inv DONC NEG-Y, c'est-à-dire ANT-X DONC NEG-Y

(ANT : 反意語)

absence [des tours=MD-inv] DONC la visibilité,

c'est-à-dire

présence DONC la visibilité

事例 3 :

(21) « On pense souvent que les salles de rédaction sont enfumées et couvertes de cendriers. Si les gens visitaient celle du *Washington post*, ils seraient surpris: on ne compte ici plus qu'environ 330 fumeurs, sur 500 personnes. Moi, je fume dans la rue, même en hiver. Il y a bien un fumoir, mais c'est une vraie chambre à gaz, je n'y mettrais jamais les pieds. Je préfère voir le ciel, les passants.[...] »

(*Libération*, 米国の禁煙事情についてのインタビュー)

この例の下線部は、論証的な観点から次のように言い換えられる(同義だという意味ではなく、言い換えても論証の流れは変わらないということ)。

(21a) Le fumoir du *Washington post* est une vraie chambre à gaz.

(cf. > Tu exagères, un fumoir n'est pas une chambre à gaz.)

ここでは、du *Washington post* が fumoir を限定するが、これがどのような意味で脱現実化修飾子としてはたらくかということは、述語 *une vraie chambre à gaz* によって決定される。(21)の下線部に続く発話から、ここで

導入された *une vraie chambre à gaz* は、次のような論証に結びつくと考えられる。

(22) C'est une vraie chambre à gaz DONC il ne faut pas y entrer.

この論証が主語名詞句にも適用され、

(23) C'est le fumoir du *Washington post* DONC il ne faut pas y entrer.

という論証が指定されることで、*du Washington post* が、実際には次のような脱現実化修飾子としてはたらいっていることがわかる。

(24) C'est un fumoir *trop enfumé* DONC il ne faut pas y entrer.

つまり、(21a)では、*un fumoir trop enfumé* が *une vraie chambre à gaz* と、やはり無動機に言い換えられることで、誇張的・隠喩的極言の発話が成立しているのである。

(25) X MD DONC NEG-Y, c'est-à-dire W DONC NEG-Y

fumoir [du *Washington post* = *trop enfumé*] DONC NEG-entrer pour fumer,

c'est-à-dire

(vraie) chambre à gaz DONC NEG-entrer pour fumer

3. 擬似同語反復文とその他の発話：自明の理

当然のことではあるが、擬似矛盾文とは対照的に、擬似同復文の発話については、いかなる文脈においても、反論的にそれを否定することはできない（#は、その発話が論証的に容認しがたいことをあらわす）。

(26) A : Une voiture est une voiture.

B : #Tu exagères, une voiture n'est pas une voiture.

このように、発話の語彙的な意味のみから、それに対する反論が不可能であるような発話は、擬似同復文以外にも考えることができる。動力の半分以上をガソリン、半分以上を電気でまかなうハイブリッド車についての次のような発話では、擬似同復文にならんで、誇張的隠喩を否定した次のような発話も可能である。

(27) a. C'est une voiture hybride, mais une voiture est une voiture, elle

pollue quand même l'environnement.

- b. C'est une voiture hybride, mais elle n'est pas à voile, elle pollue quand même l'environnement.

(27b)の下線部を反論的に否定（極性を転換）することはできない。

(28) #Tu exagères, cette voiture (hybride) est à voile.

この例では、voiture を限定する hybride が、voiture DONC pollution という論証を脱現実化して voiture hybride (= MD-inv) DONC NEG-pollution が導かれそうところで、(27a)では擬似同復文、(27b)では「自動車は帆つきではない」という自明の文の発話によってそれが阻止され、論証 voiture DONC pollution が保持されている。(27b)についてももう少し詳しく言うと、hybride も à voile も、ともに voiture DONC pollution という論証を脱現実化する力は持っているが、これを逆転させる論証力は、voiture hybride DONC NEG-pollution よりも、voiture à voile DONC NEG-pollution のほうが強い。(27b)の下線部はこの後者の論証を否定して、NEG-voiture à voile DONC pollution とし、voiture DONC pollution という文脈を維持しているのである。

このように、擬似同復文の発話は、上にみたような自明の発話に近い論証構造に結びついており、本稿では、このような発話をまとめて「自明の発話」とよぶ。

「自明の発話」

ある発話において、その主語の意味内容と述語のそれとの間に意味的齟齬がないことが、その発話の語彙的意味内容のみによって知られ、その発話において、「Tu exagères」というつなぎことばとともに反駁し、その発話の極性を転換することができないとき、その発話は「自明の発話」である。

「自明の発話」には、古典的な意味論で分析文とよばれる文の発話や、またいわゆる緩叙法的な発話も含まれることがある。また、逆転されそうな論証を維持するという性質から、多くの場合反論的な発話としてあらわれ

る。

「自明の発話」についても、いくつかの事例をみておく。

事例 1 :

- (29) Nous biffons les chapitres qui vont de 1936 à 1939, puis de 1939 à 1945, puis de 1954 à 1962, puis 1968, puis toutes les années quatre-vingts. Qu'en dire, mon Dieu, qu'en dire qui ne soit ni injuste, ni blessant ? Les historiens, même les plus grands, ne parviennent pas à se mettre d'accord et coupez-moi ce couplet insupportable, la guerre, c'est bien dommage mais c'est la guerre. (*Sans moi*, Marie Desplechin, ある銀行の歴史についての文章を作成中に)

これは比較的はっきりとした擬似同復文の例である。戦争に彩られたこれらの時期についての記述を、校正を口実にすべて削除しようとしているときに、語り手は、下線部の発話とともに、その必要はないのではないかと自問している。アルジェリア戦争を含めた、フランス（そして銀行）にとって決して栄誉とは言えない歴史が、記述すべきものとしての戦争を脱現実化しているところで、語り手は、残念なことだけれども、戦争というのはそういうものだから、それを理由に削除するものではないと思っている。「不名誉なことである *peu glorieuse*」ということが、*guerre* の MD-inv となってしまうことが阻止され、この擬似同復文が続いているのである。この論証構造を図式的に記述すると以下ようになる。

- (30) *guerre* [*peu glorieuse* = MD-inv] DONC NEG-noter, mais *guerre* DONC noter.

事例 2 :

次は自明の発話の例である。先述の作例では、自明の発話はいずれも文法否定を含む形式だったが、これは典型的な分析文の形式である。

- (31) «Humain ou non, nous sommes tous des animaux», explique Patrick, brillant étudiant à Oxford converti au militantisme en faveur des bêtes. Il

affirme qu'il n'y a pas de différences entre les espèces humaine ou animale, le credo des fondamentalistes du FLA (Front de libération des animaux), qui n'ont pas d'animaux domestiques – des «*esclaves*» à leurs yeux – et refusent la «*domestication*». tous sont «*vegan*» (végétaliens, forme absolue de végétarisme qui interdit la consommation de viande et de poisson, ainsi que tous produits provenant de l'animal: lait, œufs, fromage, laine, cuir...). (*Libération*)

下線部は文章の冒頭にあたり, Humain ou non という譲歩的副詞句の存在がかぎとなっている。ここでの ou は, 文中に出てくる tous からわかるように, humain, non (humian) にかかわりのない nous と理解されるが, 以下で動物の飼育を esclavage と言っているように, humain であるということで, われわれがほかの動物を支配してもよいということにはならないというのが話し手の主張である。言い換えれば, humain という要素は, 一般に受け入れられているように animal の MD-inv とはならないことを述べているのである。

- (32) animaux [humains = MD-inv] DONC dominer les autres,
mais animaux DONC NEG-dominer les autres

事例 3:

最後に, 否定を含む自明の発話の例を見ておこう。

- (33) Pedro Costa ne s'intéresse pas à ses personnages comme une marquise à ses pauvres. Les pauvres ne sont pas une race, et la pauvreté n'est pas un chromosome. Si loin, si proche, *Ossos* est un film qui nous guette plus qu'un film que l'on regarde. (*Libération*)

これはポルトガルのペドロ・コスタ監督の映画『骨』に関する記事である。移民ゲットーが舞台のこの映画についてのこのコメントをどのように解釈するかについてはさまざまな議論が可能であるが, 概略, 以下のような意味で, この二つの文も, 意味的にも形式的にもほぼ平行した自明の発話となっている。ある社会階層に定着したものであるからといって, 貧困とは,

人種のように不可避免的に受け継がれていくもの、したがって措置の取りようがないものではないはずである。つまり、社会的な要因によって単に定着しているにすぎないものを、決定的なものとしてしまうことへの反論としてこのような発話がなされている。

- (34) *pauvreté installée [= MD-inv] DONC NEG-changer, mais NEG-racial (= NEG-définitive) DONC changer.*

この例で注目すべきは、述語で何が否定されているかということで、具体的な論証構造が指定されるということである。つまり述語 *...n'est pas une race, ...n'est pas un chromosome* によって、*race* や *chromosome* によるものではないが、これと同様の方向をもった、つまり論証 X *DONC NEG-changer* と結びつくような X として、この発話内の *pauvre(té)* が指定されるのである。もうひとつ類例を見ておこう。

- (35) *Par-dessus tout, ils opposent les « valeurs » portées par les animaux légendaires à la froide gestion comptable et au raisonnement des partisans de la chasse. Au téléphone, Paul Watson explique : « Nous refusons cette chasse, qui est illégale. – Si elle était légale, l'accepteriez-vous ? – Non. – Pourquoi ? – Une baleine n'est pas une vache, c'est l'animal le plus intelligent de la planète. » Tel est le dilemme écologiste : bonne gestion de la planète ou éthique émotionnelle ? plutôt « Indien » ou plutôt « baleine » ? (Le Monde)*

このあまりにも「自明な」発話では、*vache* とは、ある種「身近で凡庸な動物」のプロトタイプとして発話され、「地球上でもっとも知的な動物」である *baleine* が、このように脱現実化されることにたいする異議申し立てとして、この発話がなされている。

- (36) *baleine [comme les autres animaux normaux=MD-inv] DONC chasser, mais balaine [NEG-comme les autres] DONC NEG-chasser*

4. まとめと展望

以上にみてきたように、擬似矛盾文と擬似同語反復文は、それぞれ、「極

言的発話」,「自明の発話」というより大きな発話の集合の中に位置づけることができ、またこの両タイプの発話は、論証的に同じ文脈で、極言もしくは反論という機能をもって使用されることが明らかになった。事例でみてきたように、実際にこの論証構造を規定する要因はさまざまであるが、これをある程度単純化してまとめると、次のように言うことができる。

極言的発話：

X DONC Y という論証が可能なとき、(a) X MD-inv DONC NEG-Y が成立するが、... DONC NEG-Y という論証について X MD-inv よりもより論証力の大きい要素によって(a)を言い換えるとき、極言的発話が成立する。このとき、言い換えの要素として NEG-X を用いると、擬似矛盾文の形式 X MD-inv n'est pas X が成立し、別の語彙要素を用いると、一般に誇張的隠喩と言われる形式が成立する。

自明の発話：

X DONC Y という論証が可能で、X を意味限定する修飾語を M とする。M が MD-inv であるとき、(b) X M(D-inv) DONC NEG-Y が成立するが、M が MD-inv であることを容認せず、X DONC Y という論証を保持するために、(b)の X M を、... DONC Y という論証を導く要素で言い換えるとき、自明の発話が成立する。このとき、言い換えの要素として X そのものを用いると、擬似同語反復文の形式 X est X が成立し、別の語彙要素を用いると、一般に自明の理と言われる形式が成立する。

今後は、これらの発話にかかわるさまざまな要素をより精緻に観察し、脱現実化が実際にどのようななされているかということを、さらに正確かつ体系的に記述してゆきたい。

(本学助教授)

引用文献

Ducrot, Oswald (1995), « Les modificateurs déréalisants. » *Journal of Pragmatics*, 24, 145-

165.

大久保朝憲（2000），「擬似同語反復文と擬似矛盾文」『文學論集』49卷4号（関西大学文学会）23-40.

大久保朝憲（2001），「緩叙法の否定と誇張法の否定」『文學論集』51卷1号（関西大学文学会）1-18.

Okubo, Tomonori (2002), « Analyses argumentatives des discours dits contradictoires » in CAREL, Marion (éd.), *Les facettes du dire – hommage à Oswald Ducrot*, Kimé, 225-235.